

前期選抜出願先変更

2020. 2. 13

前期選抜出願が昨日で終了した。本日から2月17日（月）までが「前期選抜出願先変更」期間となる。変更できるのは一度である。志願先の募集定員と発表になった志願者数と競争率を見て思案に暮れる受験生もいることと思う。

志願先を変更したことが吉と出るか凶と出るかはむずかしいところである。例えば、大学進学を主とした進学校数校の中で変更するのはどうであろうか。一度出願した学校に強いこだわりがあれば別だが、そうでなければ変更を考える場合があってもおかしくはない。同じ進学校でも学校によって校風やカラーが違ってくる。そこをどのように考えるかである。

また、進学から就職まで対応している普通科や総合学科での変更を考える場合もあろう。まずは合格することを最優先に考えることが必要になってくる場合もある。受験生一人一人には、それぞれの事情がある。10人いれば10のケースがあると考えべきである。

思い返してみると、私が中学3年生を担任したケースでは志願先変更をしたことはない。それはたまたまではなく、決められた三者面談や二者面談だけでなく出願までに面談を繰り返してきた結果だと思う。100%の納得はむずかしいかもしれないが、「よしこれでいこう」と思える状態にできるかどうかである。それができれば競争率の数字に惑わされることは少なくなる。迷いは学習意欲に響く。

とは言っても、数字には魅力も魔力もある。一度きりのチャンスである。短時間の中で熟考し、ベストの結論を出してほしい。そして、決めたならば後は前に進むしかない。もし出願先を変更したとしたら、そのことが正しかったと思えるように頑張り、結果を出すしかない。

県立高校の場合は、定員を下回っても学校は維持される。これが私立高校ならばどうであろう。由々しき事態となるかもしれない。そういった面では県立高校には甘さがあると言える。営業努力、学校のPR、特色化、魅力化などが、まだまだ足りないと考えべきである。

このことは梁川高校にも当てはまる。何か打開策はないものか。民間的な発想が必要なかもしれない。次年度に向けての課題である。そして、この課題について考えることは、梁川・保原統合校のグランドデザインにも生かされると考える。

また、この時期だからこそ、改めて今回の高校入試制度改革の原点に立ち戻って考えてみたい。今回の改革の柱の一つが、今までのⅠ期選抜とⅡ期選抜を一緒にして「前期選抜」としたことである。その結果、県立高校入試はすべて3月に行うことになった。もう一つは、「一般選抜」だけでなく従来のⅠ期選抜と色合いが似ている「特色選抜」でも「学力検査」を実施することになったことである。シンプルに考えると、県立高校を受験する生徒は、全員が3月まで勉強することになったわけである。

中学校側からすると、クラスの大半が同じ意識で3月まで頑張ることができるのがいいのかもしれない。高校側では、3月まで勉強し学力をつけた生徒が入ってくるのがいいのかもしれない。制度を変えることによって改善できる面もあるが、大切なことは高校に入学した後である。生徒に力をつけさせる授業や教育活動が十分に展開されているのか。この検証がなければ、せっかく力をつけて入ってきた生徒を伸ばすことができずに終わる。制度を変えたことは、日々の教育活動の検証と改善がなされて、初めて意味をもってくる。